

坂口 昌明(さかぐち・まさあき)

1、プロフィール

詩人。文芸評論家。日本民俗学会会員。日本18世紀学会会員。長期に亘って津軽一円を歴訪し、特に岩木山信仰・伝承の実証的論考を数多く発表した。

<生没>

1933(昭和8)年6月13日 ~ 2011(平成23)年9月5日

<代表作>

『みちのくの詩学』(2007年、未知谷)、『お岩木様一代記』(2010年、津軽書房)、『安寿—お岩木様一代記奇譚—』(平成24年、遺稿集、ぶねうま舎)

<青森との関わり>

岩木山信仰・伝承の実証的研究。齋藤吉彦(詩人・民俗学者)、小山正孝(詩人)らについて、優れた論考を発表した。

2、作家解説

昭和8年6月13日、坂口武雄、愛の長男として、東京都目黒区で出生。同31年、早稲田大学大学院文学研究科入学。翌年、詩誌「山の樹」同人。詩人小山正孝、村次郎らを知る。同33年から平成2年まで、ニュース・ニッポン社や思索社に勤務。昭和55年、日本民俗学会会員。平成2年には、日本十八世紀学会会員となる。

津軽人ではない坂口には、津軽関係の論考・実証的研究が群を抜く。「回想の津軽三味線」(盲目の津軽三味線奏者高橋竹山。昭和50年)、「『弥三郎節』のミステリーを解く」(津軽を代表する民謡の一つ。平成18~19年)などを発表する。昭和46年頃から、長期に亘って津軽一円を歴訪し、特に岩木山信仰・伝承について現地調査をする。平成22年には、桜庭スエが口述、竹内長雄が採録した「津軽イダコの一詞章」の解説・対訳を試みた『お岩木様一代記』を発刊。歴訪の研

究成果を、詩論集『みちのくの詩学』(平成 19 年)として上梓する。自身でも、津軽語による長篇詩「十三道ノスタルヒヤス」他を創作した。

「岩木山奇談集」第1篇「安寿の影を追って」を新聞連載(同 19～21 年)し、実証に基づいた鋭い推理を展開した。さらに、第2篇「伝承の源流を遡る」を連載中、体調を崩し、同 23 年9月5日、東京都内の病院で急性間質性肺炎により急逝した。

この間、夭折の詩人、民俗学者齋藤吉彦を研究し、「日本民俗学異聞—齋藤吉彦における伝統主義の運命」を発表した。(同5～6年)『上磯風聞志』の復刻をも手掛けた。(同 12 年)また、小山正孝の遺稿集を編集し、『未刊ソネット集』などを刊行した。さらに、「詩人—戸謙三特輯」を掲載(詩誌「朔」、同 17～18 年)し、初期作品の発掘・研究に努めた。

常に温厚な態度で接し、時には実証に基づいた鋭い指摘をした。文学の他、音楽(特にモーツァルト)にも造詣が深い。遺稿集に『月光に花ひらく吹上の 坂口昌明詩集』、『安寿—お岩木様—代記奇譚—』(同 24 年)、『津軽いのちの唄』(同 26 年)、『ミケランジェロ周航』(同 28 年)がある。

3、資料紹介

○『安寿—お岩木様—代記奇譚—』

図書

2012(平成 24)年 10 月 15 日

195mm × 135mm

坂口の遺稿集として刊行された。序章「『お岩木様』が語られた日」から終章「イダコ桜庭スエ—代記」まで、昭和6年、桜庭スエが口述し、竹内長雄が採録した「津軽イダコの一詞章」が基になっている。平成 22 年には、その対訳を試みた『お岩木様—代記』を発刊した。